平成三十年

遠富士の澄みて座りぬ今朝の春

注連飾その真直ぐを確かめり

焦げ端をめがけ食ひつく雑煮餅

電話機新しくする

新しき電話器兄の初電話

狛犬の口に日の射し初社

陽は静か二日の昼の寺の庭

薄化粧して乙女らは冬休み

一月八日　中林奏太君

弾き初めに天才児出てざわめきぬ

天才に帽子を取りて弾き初め

一月二十日　裾野山荘へ

富士見んと高速降りて枯野原

切り花の侘助灯す紅ほのか

荒れ庭の隅に万両藪を成す

肌赤き素焼の鉢に水仙花

一月二十二日　雪　裾野に沈殿決定

冬空に降る気配あり昼の酒

季節は移る

一条の飛行機雲や冬木立ち

道筋を明かりに探る凍ての中

名を尋ぬ野梅というが盛りなり

梅の香や琴の音色も漂へり

三月の日の蠢くや猫闊歩

弥生朝夜来風雨の跡のあり

貰ひしと桃の小枝の活けてあり

二月二十四日　昌子　弓枝を伴って来訪

客迎ふ入日は富士へ二月尽

春燈や新婚の客良く笑ひ

智史ハワイで挙式

三月やハワイ土産のコーヒー香

三月四日　中林奏太君壮行演奏会
鎌倉学園を卒業してマドリッド王立音楽院へという

卒業すスペイン雄飛ギターの音

三月二十五日　裾野山荘

雪柳跳ねっかえるも楚々として

荒れ庭に花逞しきチューリップ

豊作か欅若葉の一斉に

四月三日　ふなば亭　フレンチのランチ会

午餐終え誘い合わせて花の下

そしたら鍵を忘れていて公園のベンチで待つ羽目に

俯瞰して見る花ミズキ雅にて

花水木枝の高みに揃ひゐて

こでまりの微動だにせず咲きゐたり

一畝の菜の花の咲く山の畑

日の光ぬるき甘茶は舌の上

四月二十二日早慶レガッタ　秀雄さん会

夏の川オールも声も揃いゐて

女子エイト掛け声凛と夏の川

競漕のオール翼と翻り

レガッタの勝者の拳川光る

阿里山といふ名の冷茶飲む岸辺

吾妻橋　海老屋総本舗

色淡き若煮の浅利家包に

太尾緑道

小学校の教材だという放置の桑

野に在りて桑は大樹に花穂垂る

紅花のマロニエ咲きぬ異土思ふ

ぬるき風桜若葉の下歩む

四月三十日　満月に惑星が集結という

太白を連れ西空へ早苗月

大倉山記念館

石楠花の古き館の暗き窓

洋子さんから新茶

今は北に住む友の名の新茶の荷

朝顔撒く

夜来風雨鉢土滑る五月朝

五月十日　真昼の雷雨

雷鳴の震天動地唯一声

五月十三日　十六日　裾野山荘

花も葉も泰山木の異国めき

時を得て女王然と泰山木

梅の味するソーダ水昼下がり

滋養とは無縁とぞいう胡瓜の香

午前三時

大酒のまだ醒めぬ闇ホトトギス

髙橋和巳を読む

新緑の中「悲の器」読了す

フランス時代の木綿布団カバー

夏の日やポール・マホの藍の色

臺立つも若草もあり五月の野

初任給で買った時計を腕にしてみる。やや進む

古時計初夏の時間を急ぎけり

芽が出たら。この先の手入れ作業が……

朝顔の芽出揃いて心急く

代々木公園　プリンセス・ミチコ

日の光紅蓮の薔薇の咲きにけり

山法師の花は緑の葉の台の上に咲く

山法師空飛ぶものへ咲き揃ひ

五月二十五日　古希

大火焚き産声を待つ五月の爐　黙榮　から七〇年！

土屋より殻付きそらまめ届く

到来のそらまめ炙り古希の酒

五月二十七日　家人不調で病院診察はしご

診察を終わりて夕日花柘榴

六月六日梅雨入り

雨音は符点の調べ走り梅雨

小学校時代の思い出

梅雨深し根津氏寄贈のピアノの音

初蝉は昨日聞きしと妻の言ひ

祭りが近い？

銭湯に祭りの談合声高し

世話人の法被背も伸ぶ夏祭り

六月二十七日からずっと南風の日

西空に黒雲の沸き南風

七月二日　桂歌丸　逝く　八十一歳

歌丸逝く南風蒼天に荒ぶる日

災害級の猛暑

滋養とは縁無き胡瓜塩揉みす

外気吸ふ意気地も萎ふる猛暑かな

声あらばさぞや姦し金魚群る

短夜やあの花合歓を見に行かむ

何故かジントニックを飲みたい気分

幾年月ジントニックに透けし夏

桂の葉やや列歪む白露かな

ブロッケン対岸に見え露強し

朝顔の一束も咲き心満つ

裾野山荘、甥の子　二歳

童んべに魔法を掛くる揚羽蝶

法師蝉捕らえる眼と手衰へず

代々木公園沿いのバス、ドアが開くたびに

ドアの開き都会のバスに虫の声

丹沢山中

リニア基地反対の村彼岸花

裾野山荘

東天にオリオン懸かり九月早や

草むらに朝顔凛と咲きにけり

山鳩の一声で去り秋の風

秋の雲縁輝きて鳥の影

一八日　箱根　ロープウェイで大涌谷

黒卵求める列に秋の風

フランス人の新婚カップル

新蕎麦や異国の人と話しけり

一八日夜、虫の音、凄い雨

風流と言うには凄し集く虫

虫の音を黙らせて降る夜の雨

九月一九日　朝

扉開くる木犀は今朝の風

九月二十二日　ゆり八年

母の忌や秋海棠の小叢あり

八年忌曼殊沙華満つ母の畑

夕焼け

鰯雲橙と鼠とに暮れにけり

大きな梨、梨はナイフの通りが悪い

手に余る梨キシキシと剥きにけり

十月二十七日二十八日　合同合忌にて帰省

サフランの花芯を摘みて祖母思ふ

三代の女の仕事サフラン摘み

十一月五日　箱根吟行　湿生花園

竜胆の丈低く咲く小道かな

台が岳裾柔らかし芒原

枯れ萱や木の道を来し乳母車

楓紅葉形と色をそれぞれに

十一月七日　帰りに　龍虎山長命寺

五百羅漢紅葉の巨木聳えたり

厚木からの丹沢風景

冬ざるる山襞深し日は斜め

山茶花の日に白さ増す朝の道

山茶花の零れる道に迷ひ込み

小春日や小さき店の昼餉かな

愛媛みかんお取り寄せ

災害を乗り越えみかん届きけり

秋深い代々木の街路

それぞれに色付き光る銀杏かな

柘榴の乾いた小さな黄色い落葉が風に吹かれて

路地奥へ柘榴の落葉金の帯

午前六時に出かける

薄明に踏み出し気づく時雨かな

足元に暖房の風朝のバス

冬服の女学生ゐて朝のバス

本厚木駅前

暖冬や電飾遅く点灯し

十二月九日　弓枝結婚式

かなり大胆なローブデコルテ＝襟の無い長いドレス

花嫁のデコルテ眩し冬日向

十二月十九日　家人インフルエンザA型の診断

ソフルーザを処方される

妻病みて白菜山と刻みをり

平成三十年終り